

第6回 日本医師会

赤ひげ賞

第6回 赤ひげ大賞 (5人)

- | | | |
|------|----|--------------|
| 藤巻幹夫 | 新潟 | 藤巻医院理事 |
| 河井文健 | 静岡 | 河井医院理事長・院長 |
| 塚本眞言 | 岡山 | 塚本内科医院理事長・院長 |
| 松原奎一 | 香川 | 松原病院理事長 |
| 水上忠弘 | 佐賀 | 水上医院理事長・院長 |

選考委員特別賞 (2人)

- | | | |
|------|----|----------------------|
| 鎌田眞人 | 宮城 | 歌津八番クリニック
理事長・院長 |
| 佐藤 徹 | 宮城 | 佐藤徹内科クリニック
理事長・院長 |

医療過疎地を守る「最後の砦」



ふじまき・みきお 藤巻医院理事。昭和2年、新潟県長岡市生まれ。90歳。昭和医学専門学校（現昭和大学）を卒業後、東京鉄道病院（現JR東京総合病院）の産婦人科医として勤務した後、父、敏太郎さんが院長を務めていた藤巻医院で診療を始めた。小千谷市の予防接種を40年以上担当するとともに、学校医として子供の健康管理に努めている。

藤巻幹夫氏

(新潟県小千谷市)

90歳「続けられる限り」足取り軽快

「泳ぐ宝石」とも称される新潟県小千谷市。市街地から15キロほど離れた、冬には3メートルを超える雪に覆われる同市真人町の信濃川沿いに建つ藤巻医院で患者に向き合う。

「薬はいつものを出しておきますからね」

すらすらとカルテにペンを走らせながら、柔らかな笑顔で語りかける。90歳となった現在でも、ほぼ毎日、午前中は外来の患者を診察。70代の男性は「何を相談してもかまいません」とを言わず答えてくれる。大病院に行くよりも頼りに「信頼を寄せられる」といふ。

外来の診察を終え、看護師を引き連れ、往診先へ向かう。足取りは軽快だ。往診先は20年以上診察している70歳以上の高齢者

「僕が診ると、連れてきて。診察室の緊急電話が鳴ると、柔らかな笑顔でこう即答する。どんなに待合室に患者があふれていても、急患を診察せずに断ることはない。「何でも診る、誰でも診る」がモットーだ。

伊豆半島南端の下田といえは、一年を通じて観光客でにぎわっている。にもかかわらず、3次救急病院まで車で1時間半ほどかかり、人口当たりの医師数は全国平均の7割。そんな医療過疎地で文字通り「最後の砦」として、2万人の市民と年間200万人の観光客の健康を守ってきた。

両親ともに医師。下田に根付いた住人に暮らされ、地域医療に生涯をさげられたその背中を見て育った。都内の医大を卒業して都内の病院に勤務していたが、50歳

「何でも診る、誰でも診る」モットー

「皮膚の病気にかなりやすくなるから」と、自ら高齢者の足の爪を切ることもいとわれない。海辺の街の頼もしい番人は「気力と体力が続く限り、いつになっても診療を続けますよ」と、豪快に笑った。

(田中万紀)

優しく患者に接する河井文健医師 (宮川浩和撮影)



河井文健氏

(静岡県下田市)

かわい・ふみたけ 河井医院理事長・院長。昭和15年、静岡県下田市生まれ。77歳。東京医科歯科大学卒業。東京女子医科大学消化器病センター、東京都立豊島病院を経て、平成3年に郷里に戻り両親が経営していた河井医院を継ぐ。24年までは同市内唯一の救急対応医療機関であり、現在も夜間や休日の急患受け入れを積極的に行っている。

患者に笑顔で接する塚本眞言医師 (中島久仁子撮影)



塚本眞言氏

(岡山県吉備中央町)

生まれ変わっても、この地域で医者

「歩いてもうろうのはええけど、転ばんようにしてえよ」。笑顔で声をかけながら聴診器をあてる姿に、患者と医者の距離は近く、診察室は温かな雰囲気包まれる。地元へ帰り、父親が開業した医院を継承して今年で30年。患者に寄り添う姿は、今も変わらない。

岡山県の中央部の吉備中央町。医師の少ない地域で、人口は約1300人、うち65歳以上の高齢者は半数近くという過疎高齢化が進む中山間地域だ。商店はほとんどなく、公共交通機関もない。通院が困難な患者のため平成17年、医療法人として18年、医療法人として18年、初となる介護タクシー事業を開始。19年には、通所介護サービスを受け、泊まりもできる小規模多機能施設を併設し、対応した。

多忙を極める日々も苦にならないという。「生まれ変わって医者になっても、やっぱり、この地域で医者をしてい」。こぼれる笑顔を見た。(中島久仁子)

つかもと・まこと 塚本内科医院理事長・院長。昭和25年、岡山市生まれ。67歳。川崎医科大学大学院修了。同大付属病院内科副院長などを経て63年、父親が開業した医院を継ぐ。県内の医療機関では初の介護タクシー事業を開始したり、高齢者らを地域で支える「円城安心ネット」の立ち上げに尽力したりするなど、患者に寄り添う地域医療を進めている。

【主催】 日本医師会、産経新聞社
【後援】 厚生労働省、フジテレビ、BSフジ
【特別協賛】 太陽生命保険株式会社

BSフジで来月25日放送
BSフジで来月25日放送「かかりつけ医たちの奮闘 第6回赤ひげ大賞」
2018年3月25日(日) 13:00~13:55放送

鍵を握るかかりつけ医の役割

山本周五郎氏の「赤ひげ診療」にあやかって命名した本賞も、皆さまの支援・ご協力のおかげで、6回目を迎えることができました。地域で奮闘している医師たちに光を当て、少しでもその活動の励みになればこの思いから、これまで25人の医師たちを表彰してきましたが、今回の受賞者も皆、献身的に医療活動に従事され、かかりつけ医としての信頼も厚く、まさに現代の赤ひげ先

日本医師会 横倉義武会長

生と呼ぶにふさわしい方々ばかりとなっています。日本医師会では、困難とも言われる少子高齢社会を乗り越えるための鍵は各地域で活躍する医師たちにあると考えており、国民にかかりつけ医をもつことを呼びかけ、かかりつけ医の機能を維持・向上させるためのさまざまな取り組みを行っています。

この紙面が、一人でも多くの方々に「かかりつけ医」をもつたいと思っただけのきっかけとなれば幸いです。

シニアの安心な生活へ大変重要

「日本医師会 赤ひげ大賞」おまひ「選考委員特別賞」を受賞された7人の皆さまに、心よりお慶び申し上げます。超高齢化社会、人生100歳時代が今、地域にお住まいの方々の介護・医療に対する不安解消の役役に立ちたいという思いで、今から「赤ひげ大賞」を応援させていただきます。ご協力をお願いします。

弊社は「シニアに最もやさしい生命保険会社」を目標と掲げています。

太陽生命保険 田中勝英社長

指し商品とサービスを体として安心を提供してまいります。

具体的には認知症治療保険の販売や、専門知識を有する内務員が保険金や給付金などのお支払い手続きをお手伝いさせていただきます。「かけつけ隊サービス」を開始しています。

シニアの方々の安心な生活を支える「かかりつけ医」は大変重要です。今後も「赤ひげ大賞」を継続して支援してまいります。

好評発売中!!

ひまわり認知症治療保険

認知症治療保険

太陽生命

【資料のご請求・お問い合わせは】 お客様サービスセンター
営業時間:月~金 9時~18時/土・日 9時~17時 ※祝日・年末年始(12/30~1/4)は休業します

0120-709-506 (通話無料)

http://www.taiyo-seimei.co.jp/

太陽生命 検索

T&D T&D保険グループ

第6回 日本医師会

赤い賞

地域で献身的な医療に取り組む医師を顕彰する第6回「日本医師会 赤い賞」(主催・日本医師会、産経新聞社、特別協賛・太陽生命保険)の表彰式が9日、東京都内で開かれる。大賞には全国各地で活躍する医師5人、さらに今回は被災地で献身的に働く医師2人が選考委員特別賞に選ばれている。受賞者の日々の活動を紹介します。

地域の住民から厚い信頼



笑顔で患者の緊張をほぐす松原圭一医師(岡本義彦撮影)

松原圭一氏

(香川県三木町)

まつばら・けいいち 松原病院理事長。昭和17年、香川県三木町生まれ。75歳。日本大医学部卒。同大附属板橋病院研修医、同大第二内科副手をを経て、43年、父の後を継ぎ院長に就任。以来約50年、大学病院および地域の診療所と連携し、地域住民の健康保持増進に努めている。地域の学校医として、学校保健活動にも精力的に取り組む。

香川県三木町は県庁所在地、高松市へのアクセスも良く、子育て世代に人気のエリア。故郷のこの町で、50年にわたり地域住民の健康保持増進に努める。昭和52年、町内で唯一の中学である三木中の校長となった。多くの生徒と接する中で、肥満傾向の子供や診療での血液検査で異常値を示す子供が多いことに気づき、学校での血液検査実施を教育委員会に進言したが、取り合ってもらえなかった。そこで62年から1年生300人に自費で検査を始めた。

「学校での血液検査を」実った訴え

検査は授業を妨げないよう早期に行った。空腹時の血糖値が必要のため、生徒に検査当日の朝食は取らずに登校させ、町で人気のパン屋から自費でサンドイッチと牛乳を購入し、採血後に食べさせた。数値に異常があれば本人と保護者に栄養指導を行ったり、かかりつけ医への受診を促したりした。「町全域の生徒が通う三木中の指導は、町民に対する保健教育になる」と、2年かけて教育関係者を説得し、4年目から町教委が費用を負担する。これまで検査した生徒は約8千人に上る。提唱した「学校での血液検査」は、平成24年から小学4年を対象に、小児生活習慣病予防健診として全県下で実施が始まった。「初めて検査した子供たちが40歳を超えた。今どうなっているか確認したい。やらなければならぬことが山積みで、好きな音楽を聴く時間も無いという忙しさに、中にも充実感に満ちた表情で話した。(塩田真里)

選考会 被災地支えて特別賞

受賞者選考会は昨年10月、東京都文京区の日本医師会館で開かれ、26道県医師会の推薦を受けた31人を5人に絞り込む審査が行われた。今回新たに女優の檀ふみさんと国文学研究資料館のロバート・キャンベル館長が加わり、9人の選考委員が積極的に意見を交わした。

各選考委員は、事前に候補者を点数(10点満点)で評価し、点数とは別に最終選考に残したい候補者を選挙。特に評価できる点などを発表し合った。6回目となる今回はこれ



羽田信吾委員 どの候補者も厳しい環境の中で献身的な活動をされている。災害後に通常では味わうことのない大変な思いをして、地域医療に尽力されてきた医師もいる。地域の力を引き出し、総合的に結びつける仕掛けを作り出すことが「赤い賞」にはふさわしいと感じている。



向井千秋委員 どの医師も地域の住民に寄り添い、頭が下がる思いだった。現代の赤い賞という視点から考えると、国内のどこでも同じ医療を受けられるシステムが重要。人工衛星を公衆衛生医療に利用するなど、テクノロジーを使っていくことが赤い賞にも求められている。



檀ふみ委員 過疎地で昼夜を分かたず献身的な姿に、涙ながら推薦書を読んだ。私は母を自宅で看取ったが、往診の先生が存在がどれほど心強かったことか。使命感を持った素晴らしいお医者さまがこんなにたくさんいらっしゃるのには頼もしいし、これからは多く紹介していただきたい。



ロバート・キャンベル委員 少子高齢化や地域の限界といった現代の課題に、創意工夫で活力を与え、大きな貢献をしてきた先生が多くいた。赤い賞先生たちが歩んできた道は、地方創生の一つの答えだと思う。そして、その先生たちを支え、作ってきたのは地域の患者さんたちだ。



武田俊彦委員 以前から、赤い賞には注目していた。各地に地域医療を支える先生がいて、看取りから救急まで対応している。どの先生も受賞にふさわしく選考は悩ましかった。今は他職種連携も重要な課題なので、医師以外から推薦の言葉をもらってもよいと思った。

また、羽田信吾委員、キャンベル委員、武田俊彦委員から「東日本大震災から6年半が経つが、頭張り続けている先生を表彰したい」との意見が上がり、特別賞が設けられることになった。

選考委員 羽田信吾(昭和館長、宮内庁参事) 向井千秋(宇宙航空研究開発機構技術参事、東京理科大学特任助教授) 檀ふみ(女優) ロバート・キャンベル(国文学研究資料館館長)

研究資料館長 武田俊彦(厚生労働省医政局長) 今村定臣(日本医師会常任理事) 道永麻里(日本医師会常任理事) 松本肇(産経新聞社取締役) 河合雅司(産経新聞社論説委員) オフサイダー 田中勝英(太陽生命保険社長)

水上忠弘氏(佐賀県伊万里市)



患者を診察する水上忠弘医師(永田直也撮影)

みずかみ・ただひろ 水上医院理事長・院長。昭和19年、佐賀県伊万里市生まれ。73歳。48年、昭和大学卒業、同大第2内科、三菱自動車工業川崎診療所での勤務を経て、58年から水上医院勤務。平成18、26年に伊万里、有田地区医師会会長を務め、現在顧問。高齢化率が40%を超える地域のかかりつけ医として、住民の診療に励んでいる。

患者の背景 より良い診療つながる

務め、患者の生い立ちや家族構成などの背景が分かることが、より良い診療につながる。昼間の診療で頭がふらふらと訴えた80代の男性が出た。夜に電話をしたと、土間に倒れているのを発見し、一命を取り留めたこともあった。19床のベッドが高齢者で満床。孤独死の不安から、「最期は医院で死なせてほしい」と訴える人も多い。治療、看護、介護、看取りと全過程に深く関わる。亡くなった人の法事に呼ばれることもある。「あのとき間に合わなくて、ごめんね」「手を合わせたね」と、故人に手を合わせたが心の中話しかける。「信頼してくれていたので、私のことを待っている気がするんです」(高瀬真由子)



鎌田眞人医師

選考委員特別賞

被災者を支える「町のお医者さん」 南三陸町・佐藤徹氏 被災地の地域医療を支える「町のお医者さん」だ。「きょう注射するの？」と怖がる子供に「頑張ろうね」と優しく励ます。受賞の一報に、「被災し、頑張っている先生が東北各地にいて、自分のスタイルに合った医療に携わっているのが光栄です」と喜びを語った。東日本大震災の津波で、診療所が流されるのを避難先から見た。「これで終わらさう」とある。佐藤徹氏(内科クリニック理事長・院長。昭和33年、秋田市生まれ。59歳。秋田大医学部卒業。平成12年に開業。23年に震災の津波で被災したが、24年に再建。



佐藤徹医師

避難所で役立つ た。した往診カバンが役に立つ。南三陸町鎌田眞人氏 出合い、がぜんやる気が出た。「ここに医者がいるぞ」と。宮城県南三陸町に留まり医療に従事する覚悟を語る。白衣にスニーカー。被災者が多かった。「家族の伊達男。往診が多いが、情は深く聞けない。努力の理由だ。目指しているのは、被災者に寄り添うこと。父の代からのなごみの代々医師の家系。平成7年、父の死去に伴い医院を継承した。23年の東日本大震災では、とっさに持ち出した。かまた・まさと 歌津八番クリニック理事長・院長。昭和33年、岩手県二戸市生まれ。60歳。近畿大医学部卒業。平成7年に父の医院を継承。23年に震災の津波で被災したが、同年に再開。

太陽生命は、お客さまに安心をお届けしてまいります。

お支払い手続きその場でサポート!

かけつけ隊

におまかせください。

太陽生命が一番大切にしている、保険金・給付金のお支払い。専門知識を有する内務員が、お支払い手続きに不安をもたれているお客さまのもとへ直接かけつけ、その場で手続きをサポート。いち早く安心をお届けします。お客さまの笑顔のために、太陽の「かけつけ隊」におまかせください!



[資料のご請求・お問い合わせ] お客様サービスセンター 営業時間:月~金 9時~18時/土・日 9時~17時 ※祝日・年末年始(12/30~1/4)は休業します

0120-709-506 (通話無料)

http://www.taiyo-seimei.co.jp/

